

まとめ

日本中世禅林においては、初期より杜甫の忠義は着目されていた。その詠出に関しては、杜甫の詩句や逸話を取り上げ、間接的に杜甫の忠義を称揚するにとどまった。それが中期になると、杜甫の名を直接に挙げ、忠義と共に詠出するようになる。また杜甫の詩を読んだ感想として、忠義を感じ取ったことも詠じるようになる。初期に較べると、杜甫と忠義がより明確化され、杜詩における忠義がより深く理解・考証されたことが窺える。

杜甫の忠義が高く称揚されるようになったのは、先ず第一に禅林と武家社会との関係がより密接になったため、国家に必要な忠義が頻繁に取り上げられるようになったことがあげられる。また儒学思想を会得することは詩文を製するに当たって必要な要素として認められていたことも大きな要因の一つであろう。こうした要因によって、禅僧は初期より忠義の詩人として名高かった杜甫をいっそう敬慕したと言えよう。

今後は、なぜ忠義と言えば杜甫に目を向け、その詩を忠義の面から深く読解したのか、どのように読解し、どれほど深く杜甫の忠義を認識していたのか明らかにしたい。

注

〔1〕 朝倉尚「禅林における杜甫像寸見」『文章一小技』と『杜

甫忠心』（岡山大学教養部紀要）第十一号 一九七五）参照。

〔2〕 拙稿「日本禅林における杜詩受容―忠孝への関心（初期の場合）―」（『中国中世文学研究』第四十号 二〇〇一）参照。

〔3〕 拙稿「日本禅林における杜詩受容について―中期禅林における杜甫画図賛詩に着目して―」（『中国中世文学研究』第四十五・四十六号合併号、二〇〇四）参照。

〔4〕 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―『集千家批点杜工部詩集』の中期禅林に及ぼした影響―」（『禅学研究』八六号 二〇〇八）参照。

〔5〕 和島芳男著『中世の儒学』（吉川弘文館 一九六五）・市川本太郎著『日本儒教史中世篇』（汲古書院 一九八九）参照。

〔6〕 川瀬一馬著『石井積翠軒文庫善本書目』（臨川書店 一九八二）参照。現在、当該書は所在不明。

六朝楽府詠注（十七） ―「隴頭水」七首―

小川恒男

はしがき

前稿（『中国学研究論集』第三十三号 二〇一四）の後半で『楽府詩集』巻二十一から始まる横吹曲辞に進んだものの、いつもながらの筆の遅さのために陳後主叔宝の「隴頭」一首しか取り上げられなかった。本稿は梁元帝蕭繹、劉孝威、車壇、陳後主二首、徐陵、顧野王それぞれの「隴頭水」計七首の詠注である。

「隴頭」また「隴頭水」はかなり早い段階で古辞を失い、その模擬作も梁代以前のものは今に伝わらず、現存する作品はすべて梁・陳の詩人たちの手になるものである。『徐陵集校箋』（許逸民校箋 中華書局 二〇〇八）は徐陵「隴頭水」の【題解】で「按、『太平御覽』『樂府詩集』載『隴頭水』多篇、作者有梁元帝・劉孝威・顧野王・陳後主・張正見・江総等、似属君臣唱和之作。其中多数為梁臣、徐陵此篇亦当作於梁。（按ずるに、『太平御覽』『樂府詩集』は『隴頭水』の多くの篇を載録し、作者には梁元帝・劉孝威・顧野王・陳後主・張正見・江総などがおり、どうやら君臣唱和の作であるらしい。これら

の内の多くが梁の臣下であるから、徐陵のこの作も梁代に作られたものだろう。」と述べる。彼らの「隴頭水」は下の【語釈】に引いた「三秦記」に載せる記事や『史記』『漢書』などの史書から得られた文獻的知識に基づき、所謂「西域」の表玄関である隴山に立つ旅人たちの別離の悲哀を描き出す。同じ素材で同じ主題を詠うので、千篇一律の感を拭えないのは事実である。また、「君臣唱和」の作だった可能性も確かに否定できない。しかし、「君臣唱和」という場で作られた作品には、それぞれの詩人たちが場を楽しむために凝らした表現上の工夫が見られるように思われる。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

梁・元帝蕭繹「隴頭水」

【本文及び書き下し】

1 銜悲別隴頭 悲しみを銜みて 隴頭に別れ
2 関路漫悠悠 関路 漫として悠悠たり

- 3 故郷迷遠近 故郷 遠近に迷ひ
- 4 征人分去留 征人 去留を分かたる
- 5 沙飛曉成幕 沙^{すな} 飛^ひびて 曉に幕を成し
- 6 海氣旦如樓 海氣 旦に樓の如し
- 7 欲識秦川処 秦川を識らんと欲するの処^{ところ}
- 8 隴水向東流 隴水 東に向かひて流る

【日本語訳】

- 1 悲しみを胸に抱きつつ隴山で別れ別れになった
- 2 関所への道は遙かに遠く果てしない
- 3 故郷が遠いのか近いのかさえ判断できなくなり
- 4 出征兵士たちはここに留まる者と更に先に進む者とはに分けられる

5 (この先では) 夜明けには砂が風に舞い上がってテン
トのようになり

6 明け方には砂漠の上に漂う気が楼閣のように見える

7 長安との間に横たわる秦川の平原がどこにあるかを見
分けようとすると

8 隴水が長安のある東に向かって流れていくではないか。

【校勘】

○『芸文類聚』卷四十二・『文苑英華』卷百九十八・『古
詩紀』卷八十

0 「隴頭水」、『類聚』作「隴頭水歌」。

5 「曉」、『英華』作「晚」。

6 「旦」、『英華』作「夜」、注云「一作『旦』」。

【押韻】

「頭」「樓」、下平十九侯韻。「悠」、下平二十幽韻。「留」
「流」、下平十八尤韻。尤・侯・幽同用。

【作者】五〇八く五五四。梁の第三代皇帝(在位五五二
く五五四)。武帝(蕭衍)の第七子、昭明太子蕭統、簡文
帝蕭綱の異母弟。湘東王に封ぜられ、江陵に鎮して重き
をなし、簡文帝を擁する侯景に対抗した。外からは西魏
の侵攻を受け、王室内部の抗争もあつて、在位二年あま
りで没した。『金樓子』六卷をはじめとする多くの著作が
ある知識人であり、詩作もよくした。

【語釈】

1 銜悲別隴頭 2 関路漫悠悠

「銜悲」悲しみを心に抱いて涙をしのぶ。梁・蕭子顯「春
別詩四首」(『玉台』卷九)其四に「銜悲攬涕別心知、
桃花李色任風吹(悲しみを銜みて 涕を攬り 別心
知り、桃花 李色 風の吹くに任す)」。次の「隴頭」
の語釈に引いた「三秦記」に見える俗歌に「幽咽」の
語が見えるように、隴頭での別れには忍び泣きのイメ
ージを伴う。

「隴頭」陝西省と甘肅省との間にある山の名。隴坻、隴
山とも。唐・杜佑『通典』卷一百七十四に「天水郡：

3 故郷迷遠近 4 征人分去留

「迷遠近」遠いのか近いのかさえ判断できなくなる。晋・
陶淵明「桃花源記」に「晋太元中、武陵人捕魚為業。
緣溪行、忘路之遠近。(晋の太元中、武陵の人 魚を捕
ふるを業と為す。溪に縁りて行き、路の遠近を忘る。)」。

「征人」故郷を遠く離れた旅人。また出征兵士。宋・鮑
照「擬古詩」八首其七(『玉台』卷四)に「去歲征人還、
流伝旧相識。聞君上隴時、東望久歎息(去歲 征人
還り、流伝す 旧相識。聞く 君 隴に上りし時、東
望して 久しく歎息す、と)」。

「去留」立ち去る者と留まる者。魏・曹植「桂之樹行」
に「乘躡万里之外、去留随意所欲存(躡に乘る 万里
の外、去留 意の存せんと欲する所に随ふ)」。右に
引いた「三秦記」に「上有清水四注。」とあったように、
隴山が分水嶺であることを踏まえる。

5 沙飛曉成幕 6 海氣旦如樓

「沙飛曉成幕」砂が風に吹き上げられて幕のようになる。

『漢書』蘇武伝に見える李陵の「歌」に「徑万里兮度
沙幕、為君将兮奮匈奴(万里を徑りて 沙幕を度り、
君が将と為りて 匈奴に奮ふ)とある。『説文解字』十
一篇上一・水部に「漠、北方流沙也。(漠、北方の流沙
なり。)」とあり、段玉裁は『漢書』亦仮幕為漠。『漢
書』も亦た幕を仮りて漠と為す。」と注す。梁・簡文
帝蕭綱「隴西行」三首其三に「沙飛朝似幕、雲起夜疑

城（沙）飛びて 朝に幕に似、雲 起ちて 夜に城かと疑ふ」とあり、北周・王褒「送別裴儀同詩」にも「沙飛似軍幕、蓬卷若車輪（沙）飛びて 軍幕に似、蓬巻きて 車輪の若し」とよく似た句が見られる。幕は漠に通じて北方の砂漠を言うが、ここは天幕・幔幕の意で用い、「楼」と対にする。

「海気且如楼」海のように果てしなく広がる砂漠に漂う気が楼台のように見える。蜃気楼をいう。『史記』天官書に「海旁蜃氣象楼台、広野氣成宮闕然。雲氣各像其山川、人民所聚積。（海旁の蜃氣 楼台に象り、広野の氣 宮闕然たるを成す。雲氣 各おの其の山川、人民の聚積する所に象る。）」と。

7 欲識秦川処 8 隴水向東流

「欲識」くを見分けようとする。識はわかる、見覚えがある。見分ける。齊・張融「別詩」「欲識離人悲、孤台見明月（識らんと欲す 離人 悲しみて、孤台に明月を見るを）」。

「秦川」陝西省から甘肅省にかけての秦嶺以北の平原。隴山と長安との間に横たわる。「隴頭」語釈参照。

「隴水」隴山から東南に流れ、長安に至る渭水に合流する。

梁・劉孝威「隴頭水」

【本文及び書き下し】

【校勘】
○『芸文類聚』卷四十二・『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷九十八・宋・吳棫『韻補』卷二引「裴」「售」二韵。

0 「隴頭水」、『類聚』作「横吹曲隴頭流水詩」。『韻補』作「樂府隴頭水」。

6 「祀」、『類聚』作「祠」。

7 「頓取樓蘭頭」、『英華』作「將頓樓蘭膝」、注云「一作『頓取樓蘭頭』」。「頓取」、『韻補』作「將頓」。

9 「李広」、『英華』『韻補』並作「李牧」。『英華』、注云「一作『李広』」。底本、注云「一作『李牧』」。

10 「功遂不封侯」、『英華』作「功名遂不酬」、注云「一作『功遂不封侯』」。『詩記』作「功多遂不酬」、注云「一作『功遂不封侯』」。『韻補』作「功多信不售」。

【押韻】

「頭」「鉤」「侯」、下平十九侯韻。「流」「羞」「裴」「下平十八尤韻。尤・侯・幽同用。

【作者】四九六？～五四九。彭城（江蘇省）の人。劉繪の子、劉孝綽の六弟。普通四（五二三）年、晋安王蕭綱が雍州刺史となると法曹に任じられ、ついで主簿となり、庾肩吾・徐摛・兄の劉孝儀等と蕭綱の「高齋學士」となった。蕭綱が皇太子になると太子洗馬となり、中舎人な

1 従軍戍隴頭 従軍して隴頭に成れば
2 隴水帶沙流 隴水 沙を帯びて流る
3 時觀胡騎飲 時に胡騎の飲ふを觀れば
4 常為漢国羞 常に漢国の為に羞づ
5 鸞妻成兩劍 妻を鸞りて 兩劍を成し
6 殺子祀双鉤 子を殺して 双鉤を祀る
7 頓取樓蘭頭 頓に樓蘭の頭を取り
8 就解郅支裘 就ち郅支の裘を解かん
9 勿令如李広 李広の如く
10 功遂不封侯 功 遂げて 侯に封ぜられざらしむる勿かれ

【日本語訳】

1 兵士となつて隴山で国境守備の任に就いてみると
2 隴水が砂に取り囲まれて流れていく
3 折々に遊牧民族が馬を休ませているのを目撃すると
4 いつもお国のために面映ゆく思われる
5 妻を犠牲にして二振りの劍を作り上げ
6 子を殺して二本のエダボコを神にまつたのだ
7 傳介子はあるという間に樓蘭の王の首を取つて義陽侯に封じられ
8 甘延寿や陳湯も即座に郅支單于の皮衣を切り裂いて諸侯となった
9 どうか李広のようにりっぱな功業を成し遂げても
10 諸侯に封じられなかったなどということがないように

どを歴任した。侯景の乱の際には柳仲礼が侯景の命を奉じて長江を上るのに随い、太清二（五四九）年、安陸（湖北省）で俄かに病を得て卒した。その詩は清麗と称せられ、侍宴、奉和の作が多い。

【語釈】

1 従軍戍隴頭 2 隴水帶沙流

「従軍」軍隊に身を投じる。後漢・王粲「従軍詩」五首（『文選』卷二十七）其一に「従軍有苦樂、但問所從誰（軍に従へば 苦樂有り、但だ問ふ 従ふ所は誰ぞと）」。「帶沙流」沙漠の間を流れていく。帯は取り囲むの意。

3 時觀胡騎飲 4 常為漢国羞

「胡騎」遊牧民族の騎兵。『史記』韓王信伝に「（漢）十一年春、故韓王信復与胡騎入居参合、距漢。（十一年春、故の韓王信 復た胡騎と入りて参合に居り、漢を距ぐ。）と。

「飲」去声。馬に水を飲ませる。

【漢国】漢王朝。また漢民族の王朝。

5 鸞妻成兩劍 6 殺子祀双鉤

「鸞妻」妻を犠牲にする。鸞は犠牲を殺してその血を塗つて祭る。

「成兩劍」干将・莫耶の二振りの名劍を完成させる。『吳越春秋』闔閭内伝に「闔閭 請干将鑄作名劍二枚。干

将者、呉人也。与欧冶子同師、俱能為劍。越前來獻三枚、闔閭得而宝之。以故使劍匠作為二枚、一曰干将、二曰莫耶。莫耶干将之妻也。干将作劍、采五山之鉄精、六合之金英、候天伺地、陰陽同光、百神臨觀、天氣下降、而金鉄之精、不銷淪流。於是干将不知其由。莫耶曰、『子以善為劍聞於王、使子作劍、三月不成、其有意乎』。干将曰、『吾不知其理也』。莫耶曰、『夫神物之化、須人而成。今夫子作劍、得無得其人而後成乎』。干将曰、『昔吾師作冶金鉄之類不銷、夫妻俱入冶炉中、然後成物。至今後世即山作冶、麻経蓑服、然後敢鑄金於山。今吾作劍不变化者、其若斯耶』。莫耶曰、『師知爍身以成物、吾何難哉』。於是干将妻乃断髮剪爪投於炉中、使童女童男三百人鼓橐装炭、金鉄乃濡、遂以成劍。陽曰干将、陰曰莫耶。陽作亀文、陰作漫理。干将匿其陽、出其陰而獻之。闔閭甚重。（闔閭）干将に鑄て名劍二枚を作らんことを請ふ。干将は、呉人なり。欧冶子と師を同じくし、俱に能く劍を為る。越前に來たりて三枚を獻じ、闔閭得て之れを宝とす。故を以て劍匠をして二枚を作為せしめ、一を干将与曰ひ、二を莫耶と曰ふ。莫耶は干将の妻なり。干将、劍を作るに、五山の鉄精、六合の金英を采り、天を候ひ地を伺ひ、陰陽光を同じくし、百神臨觀し、天氣下降するも、金鉄の精、銷けずして淪流す。是に於いて干将其の由を知らず。莫耶曰く、『子善く劍を為るを以て王に聞こえ、子をして劍を作らしむも、三月にして

成らず、其れ意有るか』と。干将曰く、『吾其の理を知らざるなり』と。莫耶曰く、『夫れ神物の化は、人を須ちて成る。今夫子劍を作るに、其の人を得る無きを得て、而る後に成らん』と。干将曰く、『昔吾が師作るに金鉄の類を治て銷けざれば、夫妻俱に冶炉の中に入り、然る後に物を成す。今に至りて後世山に即きて作治し、麻経蓑服し、然る後に取て金を山に鑄る。今吾劍を作りて变化せざるは、其れ斯くの若きか』と。莫耶曰く、『師は身を爍かして以て物を成すを知る、吾何ぞ難からんや』と。是に於いて干将の妻乃ち髪を断ち爪を剪りて炉中に投じ、童女童男三百人をして橐を鼓し炭を装せしむれば、金鉄乃ち濡ひ、遂に以て劍を成す。陽を干将与曰ひ、陰を莫耶と曰ふ。陽は亀文を作し、陰は漫理を作す。干将其の陽を匿し、其の陰を出だして之れを獻ず。闔閭甚だ重んず。』と見える故事に拠る。

〔祀双鉤〕二振りのかぎほこを完成させて神にまつる。鉤は武器の一種、劍に似て少し曲がつている。『吳越春秋』闔閭内伝に「闔閭既宝莫耶、復命於國中作金鉤、令曰、『能為善鉤者、賞之百金』。吳作鉤者甚衆、而有之貪王之重賞也。殺其二子以血釁金、遂成二鉤。獻於闔閭、詣宮門而求賞。王曰、『為鉤者衆、而子独求賞、何以異於衆夫子之鉤乎』。作鉤者曰、『吾之作鉤也、貪而殺二子釁成二鉤』。王乃举衆鉤以示之、『何者是也』。王鉤甚多、形体相類、不知其所在。於是鉤師向鉤而呼

二子之名、『呉鴻・扈稽、我在於此、王不知汝之神也』。声絶於口、両鉤俱飛、著父之胸。呉王大驚曰、『嗟乎、寡人誠負於子』。乃賞百金、遂服而不離身。（闔閭）既に莫耶を宝とし、復た國中に命じて金鉤を作らしめ、令して曰く、『能く善鉤を為る者、之れに百金を賞せん』と。吳鉤を作る者甚だ衆く、而も之れが王の重賞を食する有るなり。其の二子を殺し血を以て金に釁り、遂に二鉤を成す。闔閭に獻じ、宮門に詣りて賞を求む。王曰く、『鉤を為る者は衆きも、子独り賞を求む。何を以て衆くの夫子の鉤と異なるか』と。鉤を作る者曰く、『吾の鉤を作るや、貪りて二子を殺し釁りて二鉤を成す』と。王乃ち衆鉤を挙げて以て之れを示し、『何れの者か是れなる』と。王の鉤甚だ多く、形体相ひ類て、其の在る所を知らず。是に於いて鉤師鉤に向かひて二子の名を呼びて、『呉鴻・扈稽、我此に在り、王汝の神を知らざるなり』と。声口に絶ゆるや、両鉤俱に飛び、父の胸に著く。呉王大いに驚きて曰く、『嗟乎、寡人誠に子に負けり』と。乃ち百金を賞し、遂に服して身より離さず。』とある故事に拠る。釁、もと雪に作り、注に「釁通釁。」とある。

7 頓取樓蘭頸 8 就解郅支裘

〔取樓蘭頸〕樓蘭王の首を取る。前漢・傳介子が樓蘭に乗り込みその王を殺して漢の威を示し、後に義陽侯に封じられたという故事。『漢書』傳介子伝に「介子謂大

將軍霍光曰、『樓蘭・龜茲數反復而不誅、無所懲艾。介子過龜茲時、其王近就人、易得也。願往刺之、以威示諸国』。大將軍曰、『龜茲道遠、且驗之于樓蘭』。於是白遣之。介子与士卒俱齎金幣、揚言以賜外国為名。至樓蘭、樓蘭王意不親介子、介子陽引去、至其西界、使詛謂曰、『漢使者持黃金・錦繡行賜諸国、王不來受、我去之西国矣』。即出金幣以示詛。詛還報王、王貪漢物、來見使者。介子与坐飲、陳物示之。飲酒皆醉、介子謂王曰、『天子使我私報王』。王起随介子入帳中、屏語、壮士二人從後刺之、刃交胸、立死。遂持王首還詣闕、公卿將軍議者咸嘉其功。上乃下詔曰、『其封介子為義陽侯、食邑七百戸』。（介子大將軍霍光に謂ひて曰く、『樓蘭・龜茲數しば反復するも誅せられず、懲艾する所無し。介子龜茲に過りし時、其の王人を近就せしむれば、得易きなり。願はくは往きて之れを刺し、威を以て諸国に示さんことを』と。大將軍曰く、『龜茲は道遠ければ、且く之れを樓蘭に驗せ』と。是に於いて白して之れを遣はす。介子士卒と俱に金幣を齎し、揚言して外国に賜ふを以て名と為す。樓蘭に至り、樓蘭の王介子に親しまざらんと意へば、介子陽りて引き去り、其の西界に至り、使詛謂ひて曰く、『漢の使者黄金・錦繡を持して行く諸国に賜はんとし、王來たりて受けざれば、我去りて西国に之かん』と。即ち金幣を出だして以て詛に示す。詛還りて王に報じ、王漢物を貪れば、來た

りて使者に見ゆ。介子 与に坐して飲み、物を陳べて之れを示す。酒を飲みて皆な酔ひ、介子 王に謂ひて曰く、『天子 我をして私かに王に報ぜしむ』と。王 起ちて介子に随ひ帳中に入り、屏語し、壮士二人 後より之れを刺し、刃 胸に交はりて、立ちどころに死す。遂に王の首を持し還りて闕に詣り、公卿將軍の議する者 咸な其の功を嘉す。上 乃ち詔を下して曰く、『…其れ介子を封じて義陽侯と為し、食邑 七百戸』と。』。楼蘭は紀元前二世紀頃から繁栄した商業都市。タリム盆地東端、ロプノール湖の北に位置した。四世紀、ロプノール湖の移動によつて衰えた。双声。

〔解郅支裘〕郅支单于が着ている皮衣を切り裂く。前漢の甘延寿、陳湯が郅支单于を滅ぼし、後にそれぞれ義成侯、関内侯に封じられた故事。『漢書』西域伝上に「宣帝時、匈奴乖乱、五单于並争、漢擁立呼韓邪单于、而郅支单于怨望、殺漢使者、西阻康居。其後都護甘延寿・副校尉陳湯發戊己校尉西域諸国兵至康居、誅滅郅支单于。（宣帝の時、匈奴 乖乱し、五单于 並びに争ひ、漢 呼韓邪单于を擁立するも、郅支单于 怨望して、漢の使者を殺し、西のかた康居に阻む。其の後 都護甘延寿・副校尉陳湯 戊己校尉の西域諸国の兵を發して康居に至り、郅支单于を誅滅す。）」とあり、同じく『漢書』陳湯伝に「（元帝）乃封（甘）延寿為義成侯。賜（陳）湯爵関内侯、食邑各三百戸、加賜黄金百斤。（元帝）乃ち（甘）延寿を封じて義成侯と為し。（陳）

寵に臨みて 忒はず」。

〔封侯〕領土を与えて諸侯にする。『史記』衛將軍驃騎列伝に「青嘗従入至甘泉居室、有一鉞徒、相青曰、『貴人也。官至封侯』。青笑曰、『人奴之生、得毋笞罵即足矣。安得封侯事乎』。（青 嘗て従ひ入りて甘泉の居室に至るに、一鉞徒有り、青を相して曰く、『貴人なり。官封侯に至らん』と。青 笑ひて曰く、『人奴の生、笞罵せらるる母きを得ば即ち足れり。安くんぞ封侯の事を得んや』と。）」。

梁・車壇「隴頭水」

【本文及び書き下し】

- 1 隴頭征人別 隴頭 征人 別れ
- 2 隴水流声咽 隴水 流声 咽ぶ
- 3 只為識君恩 只だ君恩を識るが為に
- 4 甘心従苦節 甘心して苦節に従ふ
- 5 雪凍弓弦断 雪 凍りて 弓弦 断え
- 6 風鼓旗竿折 風 鼓ちて 旗竿 折る
- 7 独有孤雄劍 独り孤雄の劍有り
- 8 龍泉字不滅 龍泉 字 滅せず

【日本語訳】

- 1 隴山で兵士たちは別れ別れになり
- 2 隴水は水の流れる音が咽び泣く
- 3 君王の恩愛をよく承知しているからこそ

湯に爵関内侯を賜ひ、食邑 各おの三百戸、加へて黄金百斤を賜ふ。）。郅支は匈奴の王の名。双声。

9 勿令如李広 10 功遂不封侯

〔李広〕？前一九。前漢の部將。隴山の西、隴西西紀（甘肅省天水市）の人。弓の名手であり、匈奴から「飛將軍」と呼ばれ恐れられた。しかし、しばしば悲運に見舞われ、出世することも叶わず、最期は自ら命を絶った。『史記』李將軍列伝に「初、広之従弟李蔡与広俱事孝文帝。景帝時、蔡積功勞至二千石。孝武帝時、至代相。以元朔五年為輕車將軍、從大將軍擊右賢王、有功中率、封為樂安侯。元狩二年中、代公孫弘為丞相。蔡為人在下中、名声出広下甚遠、然広不得爵邑、官不過九卿、而蔡為列侯、位至三公。（初め、広の従弟李蔡 広と共に孝文帝に事ふ。景帝の時、蔡 功勞を積みて二千石に至る。孝武帝の時、代の相に至る。元朔五年を以て輕車將軍と為り、大將軍に従ひて右賢王を撃ち、功有り率に中たり、封ぜられて樂安侯と為る。元狩二年中、公孫弘に代はりて丞相と為る。蔡 人と為り 下の中に在り、名声 広の下に出づること甚だ遠きも、然れども広は爵邑を得ず、官 九卿に過ぎずして、蔡は列侯と為り、位 三公に至る。）」とその不遇が描かれる。

〔遂功〕功業を成就する。晋・陶淵明「命子詩」十章其五に「功遂辞帰、臨寵不忒（功 遂げて 辞し帰り、

- 4 自ら望んで苦境にも変わらぬ節操を守るのだ
- 5 雪が凍り付いて弓弦が切れてしまい
- 6 風が吹きつけて旗竿をへし折ってしまう
- 7 雌劍と別れ別れになったこの雄劍だけは
- 8 刻まれた「龍泉」の文字が消えないままなのだ

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百三 無異同

【押韻】

「別」「折」「滅」、入声十七薛韻。「咽」「節」、入声十六屑韻平韻。平韻。屑・薛同用。

【作者】未詳。『先秦漢魏晋南北朝詩』には四首を収めるが、いずれも樂府である。

【語釈】

1 隴頭征人別 2 隴水流声咽

〔隴頭〕梁・元帝蕭繹「隴頭水」第1句「銜悲別隴頭」語釈参照。

〔征人〕梁・元帝蕭繹「隴頭水」第4句「征人分去留」語釈参照。

〔隴水〕梁・元帝蕭繹「隴頭水」第8句「隴水向東流」語釈参照。

「流声」世に流布している名声、流れるような美しい音楽、淫らな音楽などの意で用いられるが、ここは川の水が流れる音。梁・劉孝綽「權歌行」に「舟子行催棹、無所喝流声（舟子 行ゆく棹を催すも、流声に喝ぶ所無し）」。

3 只為識君恩 4 甘心從苦節

「君恩」君主の恩寵。魏・曹植「浮萍篇」（『玉台』卷二）に「行雲有返期、君恩儻中還（行雲 返る期有り、君恩 儻ひは中ごろ還らん）」。

「甘心」心から願う。『詩經』衛風・伯兮に「願言思伯、甘心首疾（願ひて言に伯を思ひ、甘心して首疾す）」とあり、曹植「雜詩」六首（『文選』卷二十七）其五に「閑居非吾志、甘心赴國憂（閑居は吾が志に非ず、甘心して國憂に赴かん）」。

「苦節」苦しくても変わることのない節操。宋・鮑照「學古詩」に「實是愁苦節、惆悵憶情親（實に是れ苦節を愁ひ、惆悵として情親を憶ふ）」。

5 雪凍弓弦斷 6 風鼓旗竿折

「雪凍」降り積もった雪が凍る。『芸文類聚』卷二に引く後漢・蔡邕「琴操」に「曾子耕太山之下、天雨雪、凍、旬日不得歸。（曾子 太山の下に耕し、天 雪を雨らせ、凍り、旬日 帰るを得ず。）」と。

「弓弦斷」弓弦が切れる。晉・張華「博物志」に「武帝

射于甘泉宮、帝弓弦斷。（武帝 甘泉宮に射るに、帝の弓 弦 斷ゆ。）」と。

「風鼓」強い風が叩くように吹きつける。晉・潘岳「楊氏七哀詩」に「山氣冒岡嶺、長風鼓松柏（山氣 岡嶺を冒ひ、長風 松柏を鼓つ。）」。

「旗竿折」旗竿が折れる。不吉な事とされる。『宋書』五行志一に「桓玄始篡、龍旂竿折。（桓玄 始めて篡ふや、龍旂 竿 折る。）」。

7 独有孤雄劍 8 龍泉字不滅

「孤雄劍」干将、莫耶が作った二振りの劍の内の一方。

梁・劉孝威「隴頭水」第5句「鸞妻成兩劍」語釈に引いた『吳越春秋』とは別に『搜神記』卷十一「三王墓」に、「楚干将・莫耶、為楚王作劍、三年乃成。王怒欲殺之。劍有雌雄。其妻重身當產、夫語妻曰、『吾為王作劍、三年乃成。王怒、往必殺我。汝若生子是男、大、告之曰、『出戶望南山、松生石上、劍在其背』。於是即將雌劍、往見楚王。王大怒、使相之、劍有二、一雄一雌、雌來雄不來。王怒、即殺之。（楚の干将・莫耶、楚王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王 怒りて之れを殺さんと欲す。劍に雌雄有り。其の妻 重身にして産むに当たり、夫 妻に語けて曰く、『吾 王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王 怒り、往けば必ず我を殺さん。汝 若し子を生みて是れ男なれば、大なりて、之れに告げて曰へ、『戸を出でて南山を望まば、

松 石上に生じ、劍 其の背に在り』と。是に於いて即ち雌劍を將ちて、往きて楚王に見ゆ。王 大いに怒り、之れを相せしむるに、劍に二有り、一は雄 一は雌、雌は来たれども 雄は来たらず。王 怒りて、即ち之れを殺す。）」とある。

「龍泉」劍の名。干将、莫耶が作った名劍になぞらえる説話が『晋書』張華伝に「初、吳之未滅也、斗牛之間常有紫氣、道術者皆以吳方強盛、未可図也。惟華以為不然。及吳平之後、紫氣愈明。華聞予章人雷煥妙達緯象、乃要煥宿、屏人曰、『可共尋天文、知將來吉凶』。因登樓仰觀、煥曰、『僕察之久矣、惟斗牛之間頗有異氣』。

華曰、『是何祥也』。煥曰、『宝剑之精、上徹於天耳』。華曰、『君言得之。吾少時有相者言、吾年出六十、位登三事、当得宝剑佩之。斯言豈效与』。因問曰、『在何郡』。煥曰、『在予章豐城』。華曰、『欲屈君為宰、密共尋之、可乎』。煥許之。華大喜、即補煥為豐城令。煥到県、掘

獄屋基、入地四丈余、得一石函、光氣非常、中有双劍、並刻題、一曰龍泉、一曰太阿。其夕、斗牛間氣不復見焉。遣使送一劍並土与華、留一自佩。華得劍、宝愛之、常置坐側。報煥書曰、『詳觀劍文、乃干将也。莫邪何復不至。雖然、天生神物、終当合耳』（初め、吳の未だ滅びざるや、斗牛の間 常に紫氣有り、道術者 皆な以へらく 吳 方に強盛にして、未だ図るべからざるなりと。惟だ華のみ以為へらく 然らずと。吳の平らぐの後に及ぶも、紫氣 愈いよ明らかな

り。華 予章の人 雷煥の緯象に妙達するを聞き、乃ち煥を要きて宿らしめ、人を屏けて曰く、『共に天文を尋ねて、將來の吉凶を知るべし』と。因りて樓に登りて仰ぎ觀るに、煥 曰く、『僕 之れを察すること久し、惟だ斗牛の間 頗る異氣有るのみ』と。華 曰く、『是れ何の祥しなるか』と。煥 曰く、『宝剑の精、上りて天に徹るのみ』と。華 曰く、『君の言 之れを得たり。吾 少き時 相者の言ふ有り、吾 年 六十を出でて、位 三事に登り、当に宝剑を得て之れを佩ぶべしと。斯の言 豈に效さんや』と。因りて問ひて曰く、『何れの郡に在るか』と。煥 曰く、『予章の豐城に在り』と。華 曰く、『君に屈ひて宰と為し、密かに共に之れを尋ねんと欲す、可なるか』と。煥 之れを許す。華 大いに喜び、即ち煥を補して豐城の令と為す。煥 県に到り、獄屋の基を掘るに、地に入ること四丈余にして、一石函を得、光氣 常に非ず、中に双劍有り、並びに題を刻し、一に龍泉と曰ひ、一に太阿と曰ふ。其の夕べ、斗牛の間 氣 復た見れず。使ひを遣はして 一劍並びに土を送りて華に与へしめ、一を留めて自ら佩ぶ。華 劍を得て、之れを宝愛し、常に坐の側らに置く。詳らかに劍文を觀るに、乃ち干将なり。莫邪 何ぞ復た至らず。然りと雖も、天 神物を生ぜば、終に當に合ふべきのみ』と。と見える。

「字不滅」劍に刻まれた「龍泉」の文字が消えることは

なく、剣はいつでも光り輝いている。「古詩十九首」
〔文選〕卷二十九 其十七に「置書懷袖中、三歳字不滅（書を置く 懷袖の中、三歳 字 滅せず）」。

陳・後主叔宝「隴頭水」二首其一

【本文及び書き下し】

- 1 塞外飛蓬征 塞外に 飛蓬 征き
- 2 隴頭流水鳴 隴頭に 流水 鳴る
- 3 漠処揚沙暗 漠処 揚沙 暗く
- 4 波中燥葉輕 波中 燥葉 輕し
- 5 地風水易厚 地 風ふきて 水 厚くなり易く
- 6 寒深溜転清 寒さ 深くして 溜れ 転た清し
- 7 登山一回顧 山に登りて 一たび回顧すれば
- 8 幽咽動辺情 幽咽して 辺情動く

【日本語訳】

- 1 辺境ではヨモギが風に吹かれて転がり
- 2 隴山では川が音を立てて流れていく
- 3 沙漠は風が巻き上げた砂のために暗くなり
- 4 川の波間には枯葉がサーッと流れ去る
- 5 大地では風が吹いて水がどんどん厚くなり
- 6 寒さが募って川の流れは益々清らかになる
- 7 隴山に登って故郷の方を振り返ると
- 8 望郷の念が湧き上がって、人も川も咽び泣くばかり

【校勘】
○『古詩紀』卷百八 無異同。

【押韻】

「征」「輕」「清」「情」、下平十四清韻。「鳴」、下平十二庚韻。「庚」「清」同用。

【作者】五五三〜六〇四。字は元秀、呉興長城（浙江省湖州市）の人。陳の宣帝頊の長子。太建十四（五八二）年、即位。禎明三（五八九）年、隋の文帝によって国を滅ぼされる。その際、井戸の中に隠れたが、捕らえられてしまう。そのまま長安に送られ、年五十二で客死した。亡国の君主として後世の評判は非常に悪いが、詩人としては梁簡文帝が提唱した「宮体」を継承し、艶麗な作が多い。今日、九十首あまりの詩篇が伝わっており、その大半が樂府である。

【語釈】

1 塞外飛蓬征 2 隴頭流水鳴

【塞外】国境地帯。『漢書』武帝紀に「遣因杆將軍公孫敖築塞外受降城。（因杆將軍公孫敖を遣はし塞外に受降城を築かしむ。）。梁・吳均「辺城將詩四首」其一に「塞外何紛紛、胡騎欲成群（塞外 何ぞ紛紛たる、胡騎群を成さんと欲す）」と。梁詩以前には見当たらない。

【飛蓬】蓬は秋になると根が抜け枝が折れて風に転がる。

語は『詩経』衛風・伯兮に「自伯之東、首如飛蓬（伯の東してより、首 飛蓬の如し）」と見えるが、これは乱れた髪比喻。曹植「雜詩」六首（『文選』卷二十七）其二に「転蓬離本根、飄飄隨長風（転蓬 本根を離れ、飄飄として長風に随ふ）」と「転蓬」の語が漂泊するものの比喻として用いられる。向島成美氏『漢詩のことば』（大修館書店 一九九八）「飛ぶ蓬」に詳しい。以下、第1句から第6句まで風と水とが交互に描かれる。

【流水】流れ去る川の水。魏・劉楨「贈五官中郎將詩四首」（『文選』卷二十三）其二に「逝者如流水、哀此遂離分（逝く者は流水の如く、此に遂に離分せんことを哀しむ）」。

3 漠処揚沙暗 4 波中燥葉輕

【漠処】沙漠。漠は中国北方の砂漠をいう。『説文解字』十一篇上・水部に「漠、北方流沙也。」とある。処は場所であることを示す接尾辞。陳後主「雉子斑」に「雉声風処遠、翅影雲間連（雉声 風処に遠く、翅影 雲間に連なる）」。

【揚沙】風に巻き上げられた砂。魏・劉楨「贈五官中郎將詩四首」（『文選』卷二十三）其四に「涼風吹沙礫、霜氣何皚皚（涼風 沙礫を吹き、霜氣 何ぞ皚皚たる）」とあり、李善注に「『易通卦驗』曰、『異氣不至、則大風揚沙（異氣 至らざれば、則ち大風 沙を揚ぐ）。」

とある。

【燥葉】枯葉。六朝詩では他に用例が見当たらない。

5 地風水易厚 6 寒深溜転清

【地風】風が大地を吹き抜ける。六朝詩では他に用例が見当たらない。天風の語は漢・蔡邕「飲馬長城窟行」（『玉台』卷一、『文選』卷二十七作「古辞」）「枯桑知天風、海水知天寒（枯桑は天の風を知り、海水は天の寒さを知る）」と見える。

【寒深】寒さが厳しくなる。六朝詩では他の用例が見当たらない。『水経注』鮑丘水に「伏梁山、山高峻、巖鄣寒深、陰崖積雪、凝氷夏結。（伏梁山、山 高峻にして、巖鄣 寒さ深く、陰崖 雪を積み、凝氷 夏 結ぶ。）」と。

【溜転清】川の流れが益々清らかになる。

7 登山一回顧 8 幽咽動辺情

【回顧】振り返って見る。漢・蔡邕「翠鳥」詩に「回顧生碧色、動搖揚縹青（回顧すれば碧色を生じ、動搖すれば縹青を揚ぐ。）」。

【辺情】国境地帯にやって来た人々の望郷の思い。これも六朝詩では他に用例が見当たらない。

陳・後主叔宝「隴頭水」二首其二
【本文及び書き下し】

- 1 高隴多悲風 高隴 悲風多く
- 2 寒声起夜叢 寒声 夜叢に起こる
- 3 禽飛暗識路 禽 飛びて 暗に路を識り
- 4 鳥転逐征蓬 鳥 転じて 征蓬を逐ふ
- 5 落葉時驚沫 落葉 時に沫に驚き
- 6 移沙屢擁空 移沙 屢しば空を擁す
- 7 回頭不見望 頭を回らずも 見望せず
- 8 流水玉門東 流水 玉門の東

【日本語訳】

- 1 高く聳える隴山には悲しみを誘う風がしばしば吹いて
- 2 もの寂しく寒々とした音が夜の草むらから湧き上がる
- 3 鳥が飛んで行くのは闇の中でも帰り道が分かるからか
- 4 鳥が向きを変えたのは風に転がるヨモギを追い掛けたからか
- 5 落ち葉は折々に飛び散る水しぶきに驚き
- 6 流砂はいつもいつも何もない空間を抱く
- 7 後ろを振り返っても何も見えず
- 8 隴山から玉門関の東へと水が流れるばかりなのだ

【校勘】

○『古詩紀』卷百八

無異同。

【押韻】

「風」「叢」「蓬」「空」「東」、上平一東韻。

【語釈】

1 高隴多悲風 2 寒声起夜叢

「高隴」高々と聳える隴山。

「多悲風」悲しみを誘う風がしばしば吹き付けてくる。

「古詩十九首」(『文選』卷二十九) 其十四に「白楊多悲風、蕭蕭愁殺人(白楊に悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す)」と。また魏・曹植「雜詩」六首(『文選』卷二十九) 其一到「高台多悲風、朝日照北林(高台に悲風多く、朝日 北林を照らす)」と。以下、第6句まで悲風を承けての表現が続く。

「寒声」もの寂しく寒々とした音。梁・沈約「寒松詩」に「梢聳振寒声、青葱標暮色(梢 聳えて 寒声を振るひ、青葱 暮色に標る)」。

「夜叢」夜の草むら。六朝詩では他の用例が見当たらない。

3 禽飛暗識路 4 鳥転逐征蓬

「禽飛」鳥が空を飛ぶ。梁・吳均「同柳吳興烏亭集送柳舍人詩」に「流連して 百舌 睥睨、下上して陽禽 飛ぶ」。

「暗識路」前句の「夜叢」を承けて、暗闇の中でも帰り道を識別できる。梁・沈約「別范安成詩」(『文選』卷二十)に「夢中不識路、何以慰相思(夢中 路を識ら

ず、何を以てか 相思を慰めん)」。

「逐征蓬」風に転がるヨモギを追い掛ける。梁・沈約「江蘿生幽渚」詩に「所惜改驩晒、豈恨逐征蓬(所惜しむ所は改めて驩晒し、豈に征蓬を逐ふを恨みんや)」。

5 落葉時驚沫 6 移沙屢擁空

「驚沫」落ち葉が「悲風」に舞い上がる水しぶきに驚く。語は沈約「從軍行」に「凌濤富驚沫、援木闕垂蘿(濤を凌げば驚沫に富み、木を援くに垂蘿を闕く)」と見える。

「移沙」流砂。『水經注』河水に「余按、南河・北河及安陽県以南、悉沙阜耳。無他異山。故『広志』曰、『朔方郡北、移沙七所、而無山以擬之』。是義志之僻也。(余按ずるに、南河・北河 及び安陽県以南は、悉く沙阜なるのみ。他に異山無し。故に『広志』に曰く、『朔方郡の北、移沙 七所、而るに山の以て之れに擬する無し』と。是れ義志の僻なり。)」と。

「擁空」砂が「悲風」に巻き上げられる様を、何もない空間をいだと表現した。六朝詩では他に用例が見当たらない。

7 回頭不見望 8 流水玉門東

「玉門」関所の名。甘肅省敦煌の南西にあった。『史記』大宛列伝に「於是酒泉列亭鄣至玉門矣。(是に於いて酒泉より列亭鄣を列ねて玉門に至る。)」とあり、『集解』

に「韋昭曰、『玉門関、在龍勒界』。(韋昭 曰く、『玉門関、龍勒の界に在り。)」と。詩では梁・虞羲「詠霍將軍北伐詩」(『文選』卷二十一)に「玉門罷斥候、甲第始修營(玉門 斥候を罷め、甲第 始めて修營す)」と見えるのが早いようである。

陳・徐陵「隴頭水」

【本文及び書き下し】

- 1 別塗聳千仞 別塗 聳ゆること千仞
- 2 離川懸百丈 離川 懸かること百丈
- 3 攢荆夏不通 攢荆 夏も通ぜず
- 4 積雪冬難上 積雪 冬は上り難し
- 5 枝交隴底暗 枝 交はりて 隴底 暗く
- 6 石礙坡前響 石 礙げて 坡前に響く
- 7 回首咸陽中 首を回らず 咸陽の中
- 8 唯言夢時往 唯だ言ふ 「夢時に往かん」と

【日本語訳】

- 1 君と別れてからたどる隴山の道は千仞の高さに聳え
- 2 隴水の流れは百丈の高さから真つ直ぐに落ちて来る
- 3 隴山の道は群生するイバラのために夏でも通れないし
- 4 降り積もった雪のために冬は登るのが難しい
- 5 枝が重なり合って隴水の流れる坂は光が乏しく
- 6 石が流れをさえぎる音が隴山の坂に響き渡る
- 7 都にいた頃のことを思い出してみても

8 君は「夢の中でそちらに参ります」と言うだけだった

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百十・漢魏六朝百三家集』卷百三下

3 「夏」、『英華』注云「一作『下』」。

4 「冬」、『英華』注云「一作『終』」。

6 「坡」、『英華』『詩記』『百三家集』並作「波」。

8 「夢時往」、『英華』作「往時夢」。

【押韻】

「丈」「上」「響」「往」、上声三十六養韻。

【作者】五〇七～五八三。梁、陳に仕えた文人。字は孝穆、東海郡郟（山東省）の人。父の徐摛は庾信の父庾肩吾とともに梁の太子蕭綱（後、簡文帝）の文学サロンを代表する文人であり、「宮体詩」の形成に大きな影響を与えた。徐陵も蕭綱に優遇され、その命を受けて『玉台新詠』を編集した。北朝に使いしている間に梁が滅びたが、苦難の末に南帰し、陳に仕え吏部尚書など高官を歴任して政治的にも重きを成した。また文壇の領袖として庾信と名を齊しくし「徐庾体」と称された。『玉台新詠』序「など文章でも優れた作品を残している」。

【語釈】

「積雪」積もった雪。晋・陸機「苦寒行」（『文選』卷二十八）に「凝氷結重澗、積雪被長巒（凝氷 重澗に結び、積雪 長巒を被ふ）」

5 枝交隴底暗 6 石礙坡前響

「枝交」枝が生い茂って交錯する。梁・劉琨「相逢狭路間」に「枝交幘不見、聴静吹纔聞（枝 交はりて 幘 聴えず、聴くこと静かにして 吹 纔かに聞こゆ）」。

「隴底」隴底に同じ。

「石礙」石が川の流れを邪魔する。梁簡文帝蕭綱「玄圃納涼詩」に「鳴波如礙石、闇草別蘭香（鳴波如礙石、闇草別蘭香）」。

「坡前」隴水が流れる坂道。第3・4句が第1句「別塗」を承けるのに対し、第5・6句は第2句「離川」を承けるので、「波前」に作った方がいいかもしれない。底本注も「『坡前』、『英華』卷一九八・『百三家集』均作『波前』、似是。」とする。

7 回首咸陽中 8 唯言夢時往

「回首」振り返る。また回顧する。

「咸陽」秦の都。陝西省西安市の北西。『史記』呂不韋列伝に「布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯遊士賓客有能増損一字者予千金。（咸陽の市門に布き、千金を其の上に懸け、諸侯の遊士賓客を延き能く一字を増損する者有れば千金を予へん。）」とあり、『索隱』に『地理志』

1 別塗聳千仞 2 離川懸百丈

「別塗」隴山を通る道。ここが別離の場として描かれることから。六朝詩では他の用例が見当たらない。

「千仞」非常に高いことを表す。魏・曹植「朔風詩」（『文選』卷二十九）五章其五に「俯降千仞、仰登天阻（俯して千仞に降り、仰ぎて天阻に登る）」とあり、李善注は『莊子』秋水に「千仞之高、不足以極其深。（千仞の高きも、以て其の深きを極むるに足らず。）」とあるのを引く。一仞は七尺、一説に八尺。

「離水」ここは隴水を指す。「別塗」と対になっている。やはり別離の場面に描かれることから。六朝詩では他の用例が見当たらない。

「百丈」高く長いことを表す。梁・沈約「新安江至清、淺深見底、貽京邑遊好詩」（『文選』卷二十七）に「千仞写喬樹、百丈見遊鱗（千仞に喬樹を写し、百丈に遊鱗を見る）」。一丈は十尺。

3 攢荊夏不通 4 積雪冬難上

「攢荊」群生したイバラ。攢は寄り集まる。斉・謝朓「詠薔薇詩」に「發萼初攢紫、余采尚羣紅（発萼 初めて紫を攢め、余采 尚ほ羣紅なり）」。

「不通」通り抜けることができない。魏・嵇康「遊仙詩」に「願想遊其下、蹊路絶不通（願ひて其の下に遊ばんと想ふも、蹊路 絶えて通ぜず）」と。二句、第1句「別塗」を承ける。

『右扶風渭城県、故咸陽、…』案、咸訓皆、其地在渭水之北、北阪之南、水北曰陽、山南亦曰陽、皆在二者之陽也。『地理志』に『右扶風 渭城県、故の咸陽なり、…』と。案ずるに、咸 皆と訓じ、其の地 渭水の北、北阪の南に在り、水の北を陽と曰ひ、山の南も亦た陽と曰ひ、皆な二者の陽に在るなり。」と。

「夢時」夢で見た時に。六朝詩では他の用例が見当たらない。

梁・顧野王「隴頭水」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|---------------|
| 1 隴底望秦川 | 隴底に秦川を望めば |
| 2 迢遞隔風煙 | 迢遞として 風煙に隔てらる |
| 3 蕭条落野樹 | 蕭条として 野樹落ち |
| 4 幽咽響流泉 | 幽咽して 流泉響く |
| 5 瀚海波難息 | 瀚海 波 息み難く |
| 6 交河水未堅 | 交河 水 未だ堅からず |
| 7 寧知蓋山水 | 寧ぞ知らん 蓋山の水の |
| 8 逐節赴危絃 | 節を逐ひて 危絃に赴くを |

【日本語訳】

- 1 隴山から長安のある秦川の方を眺めてみても
- 2 風にたなびく霧に遥かに隔てられて見えはしない
- 3 原野の樹木は葉が落ちてもの寂しく
- 4 川の流れが響いて咽び泣きのよう

5 北方の瀚海では波がなかなか収まらないというし
6 遙か西方の交河では水がまだ張り詰めていないような
7 まさか宣城の蓋山の水が
8 リズムに合わせ弦の高い音色につれて湧き上がろうとは思いいも寄らなかつた

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百十六

1 「隴底」、『英華』作「隴頭」。

5 「波」、『英華』作「将」。

【押韻】

「川」「泉」、下平二仙韻。「煙」「堅」「絃」、下平一先韻。
先・仙同用。

【作者】五一九く五八一。梁・陳の文字学者、作家、画家。字は希馮。呉郡呉（江蘇省蘇州市）の人。王褒とともに梁の宣城王蕭大器の賓客となつた時、王のために古賢の像を描き、褒も賛を作つて「二絶」と称された。また、簡文帝蕭綱の命を受け『玉篇』を撰した。梁が滅びると陳に仕え、黄門侍郎、光祿卿などを歴任した。現在、詩十首を伝えるが、大半が樂府である。

【語釈】

1 隴底望秦川 2 迢遞隔風煙

選』卷三十）に「風煙四時犯、霜雨朝夜沐（風煙 四時に犯し、霜雨 朝夜に沐す）」とあるのが早い例だが、これは風ともやの意。梁・何遜「至大雷聯句」の「関風煙動、蕭蕭江雨声（関関として 風煙 動き、蕭蕭として 江雨 声あり）」は風にたなびくもやの意だろう。

3 蕭条落野樹 4 幽咽響流泉

「蕭条」もの寂しい様。暈韻。

「落野樹」原野に生えた樹木の葉が枯れ落ちる。野樹は梁・虞騫「登鍾山下峯望詩」に「遙看野樹短、遠望樵人細」と。

「幽咽」咽び泣く。しばしば悲しみを誘う川の流れの音。「隴底」語釈に引いた「三秦記」中の「俗歌」に見える。中古音では幽、咽いづれの声母も影母、双声。

「流泉」流れていく湧き水。『詩経』大雅・公劉に「相其陰陽、觀其流泉（其の陰陽を相、其の流泉を觀る）」。

泉が押韻字なので「流泉響」を倒置し、第3句「野樹落」もそれに合わせて倒置する。

5 瀚海波難息 6 交河水未堅

「瀚海」瀚海、幹海とも。中国北方の海の名、また湖の名、また戈壁砂漠を指すなど諸説ある。『玉篇』水部に「瀚、音汗、海名。」とあり、顧野王は海の名と解していたようである。『史記』衛將軍驃騎列伝に「驃

「隴底」隴坻に同じ。隴山とも。陝西省と甘肅省との間にある山の名。唐・杜佑『通典』卷一百七十四に「天水郡……有大坂、名曰隴坻、亦曰隴山。（天水郡……大坂有り、名づけて隴坻と曰ひ、亦た隴山と曰ふ。）」。

また、『太平御覽』卷五十六に引く「三秦記」に「其坂九廻、不知高幾里。欲上者七日乃越。高処可容百余家、下処数十万戸。上有清水四注。俗歌曰、『隴頭流水、鳴声幽咽。遙望秦川、心肝断絶』。去長安千里、望秦川如帶。又関中人上隴者、還望故郷悲思、而歌則有絶死者。（其の坂 九廻し、高きこと幾里なるかを知らず。上らんと欲する者 七日にして乃ち越ゆ。高き処は百余家を容るべく、下き処は数十万戸。上に清水の四もに注ぐ有り。俗歌に曰く、『隴頭流水、鳴声 幽咽す。遙かに秦川を望めば、心肝 断絶す』と。長安を去ること千里、秦川を望めば帯の如し。又た関中の人 隴に上れば、故郷を還望して悲思し、而も歌へば則ち絶死する者有り。）」。

「秦川」陝西省から甘肅省にかけての秦嶺以北の平原。隴山と長安との間に横たわる。「隴底」語釈参照。

「迢遞」遙かに遠い様。双声。齊・謝朓「鼓吹曲」入朝曲（『文選』卷二十八）に「逶迤帶淥水、迢遞起朱樓（逶迤として淥水を帶び、迢遞として朱樓を起す）」とあり、李善注は「劉達注曰、『迢遞、遠望懸絶也。』」とする。

「風煙」風にたなびくもや。謝朓「和王著作八公山」(『文

騎將軍去病率師、……。登臨翰海。（驃騎將軍去病 師を率ゐて、……。翰海に登臨す。）」とあり、『漢書』衛青霍去病伝「登臨翰海」には「張晏曰、『登海辺山以望海也。……』如淳曰、『翰海、北海名也。』（張晏曰く、『海辺の山に登りて以て海を望むなり。……』と。如淳 曰く、『翰海、北海の名なり』と。）」との注がある。これに対し、王先謙『漢書補注』は斉召南の「瀚海即大漠之別名、沙磧四際無涯、故謂之海。張晏・如淳直以大漠北海解之、非也。本文明云『去病出代・右北平二千余里』、則其地正在大漠。安能及絶遠之北海哉。（瀚海は即ち大漠の別名にして、沙磧 四際 涯無し、故に之れを海と謂ふ。張晏・如淳 直ちに大海・北海を以て之れを解するは、非なり。本文 明らかに『去病 代・右北平より出づること二千余里』と云ふ、則ち其の地は正に大漠に在り。安くんぞ能く絶遠の北海に及ばんや。）」との案語を引く。新釈漢文大系『史記 十一』（青木五郎 明治書院 二〇〇四）は「○臨翰海 山上から翰海を見下ろす。『翰海』は『瀚海』ともいい、(1)今のバイカル湖、(2)今の呼倫湖と貝爾湖、(3)今の達来諾爾湖、(4)戈壁沙漠、(5)今の杭愛山（の音訳）などの諸説があつて決し難い。……。ここは狼居胥山や姑衍山に登つて翰海を見下ろしたという意ではないか。」とする。中古音で瀚の声母は匣母、海は曉母、発音部位が近かつた。

「交河」川の名。新疆ウイグル自治区吐魯番（トルファ

ン)市の西、約一〇キロのところにあつた。『漢書』西域伝下に「車師前国、王治交河城。河水分流繞城下、故号交河。(車師前国、王の治 交河城。河水 分流して城下を繞り、故に交河と号す。)。梁・范雲「効古」詩(『文選』卷三十一)に「風断陰山樹、霧失交河城(風は断つ 陰山の樹、霧に失ふ 交河の城)」。後の例になるが、唐太宗李世民の「飲馬長城窟行」に「塞外悲風切、交河水已結(塞外 悲風 切に、 交河 氷已に結べり)」とあり、杜甫「高都護廳馬行」に「腕促蹄高如踏鉄、交河幾蹴曾氷裂(腕 促まり 蹄 高くして 鉄を踏むが如く、 交河 幾たびか曾氷を蹴りて裂く)」と見える。

7 寧知蓋山水 8 逐節赴危絃

「蓋山」宣城(安徽省)にあつた山の名。二句、梁・劉孝標「重答劉秣陵沼書」(『文選』卷四十三)に「蓋山之泉、聞絃歌而赴節。(蓋山の泉、絃歌を聞きて節に赴く。)」とあり、李善注に「『宣城記』曰、『臨城縣南四十里、蓋山、高百許丈、有舒姑泉。昔有舒氏女、与其父析薪此泉、処坐牽挽不動、乃還告家。比還、唯見清泉湛然。女母曰、「吾女本好音楽」。乃絃歌、泉涌迴流、有朱鯉一双。今作樂嬉戲、泉固涌出也。』(『宣城記』に曰く、『臨城縣の南 四十里、蓋山、高さ百許丈、舒姑泉有り。昔 舒氏の女有り、其の父と薪を此の泉に析き、処りて坐し牽挽するも動かず、乃ち還りて家に告

ぐ。還るに比び、唯だ清泉の湛然たるを見るのみ。女の母 曰く、「吾が女 本 音楽を好む」と。乃ち絃歌すれば、泉 涌きて迴流し、朱鯉一双有り。今 樂を作して嬉戲すれば、泉 固より涌出するなり」と。)と見える故事に拠る。蓋、六臣注に「合」と音注がある。顧野王が宣城王蕭大器の賓客だったことに関わりがあると思われる。

「逐節」リズムに合わせる。右に見た「赴節」に同じ。宋・鮑照「夜聽妓詩二首」其二に「傾情逐節寧不苦、特為盛年惜容華(情を傾け節を逐ひて 寧ぞ苦しまざる、特だ盛年の為に容華を惜しむのみ)」と。

「危絃」高い音を出すために強く張った絃。晋・張協「七命」(『文選』卷三十五)に「撫促柱則酸鼻、揮危絃則涕流。(促柱を撫すれば則ち酸鼻し、危絃を揮へば則ち涕流る。)」とあり、李善注に「鄭玄『論語注』曰、「危、高也」。また、梁・王暕「詠舞詩」に「同情依促柱、共影赴危絃(情を同じくして促柱に依り、影を共にして危絃に赴く)」。

※本稿は平成二十七年科学研究所費基盤研究(C)「言語実験の場としての六朝楽府に関する研究」(課題番号二六三七〇四一〇)の助成を受けたものである。

載する。

『中國中世文学研究』投稿規定

一 応募資格 中国中世文学协会会员に限る。

二 応募規定

- 1 論文として未発表のものに限る。
 - 2 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
 - 3 原稿枚数は、四〇〇字詰め原稿用紙で四〇枚程度とする。ワープロ原稿の場合は、一行二五字、一頁二五行の形式で作成し、電子媒体とともに提出する。
 - 4 原稿は原則として縦書きとする。図版などを使用する場合の体裁については、編集委員会の指示に従う。
 - 5 提出期限は、八月末日と二月末日の二回とする。
 - 6 抜き刷りは、申し込みがあつた場合作成するが、費用は執筆者負担とする。
- 三 論文の掲載は、査読委員会の査読を経、編集委員会の議を経た上で決定する。

〔平成二五、二六年度査読委員〕

石川忠久(二松学舎大学顧問)

小川恒男(広島大学大学院教授)

佐藤利行(広島大学大学院教授)

中川正之(神戸大学名誉教授 立命館大学特別

招聘教授)

四 『中国中世文学研究』を、電磁的記録として複製し、

これを公衆送信することを承諾した者の論文のみ掲

中国中世文学研究 第六十五号

平成二十七年三月十三日印刷
平成二十七年三月二十日発行

編集・発行者 中国中世文学會

〒739-8522 東広島市鏡山一―二―三

広島大学大学院文学研究科内

TEL 〇八二―四二四―六六七七

発売元 (株)白帝社

〒171-0014 東京都豊島区池袋二―六五―一